

15. すぎのほないせき 杉の花遺跡

所在地：越前町織田 113-1

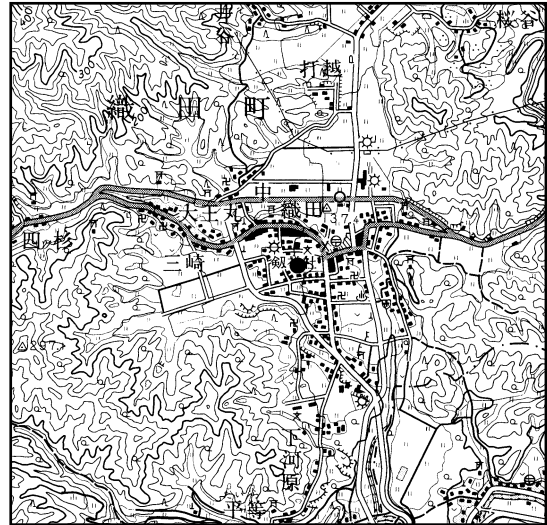
調査原因：範囲確認

調査期間：平成 23 年 7 月 13 日～8 月 3 日

調査主体：越前町教育委員会

調査面積：12 m²

時代：奈良時代～近世



位置図 (S = 1/50,000)

調査の概要 越前町教育委員会は越前町文化財悉皆調査事業の一環で、杉の花遺跡（劔神社境内地）の範囲確認調査を実施しました。今回が第2次調査となります。調査区の設定は2か所。社務所南の第1調査区、境内東端の第2調査区です。

遺構 道状遺構1（第1調査区）、石組み遺構1（第2調査区）などが検出されました。

道状遺構は第1調査区の地山面で検出されました。道を輪切りにしたような形で、地面下2.3mの地点で確認されました。地山を幅広く浅く掘り込み、両端がわずかに高くなる二段掘りの形状でした。遺構は幅3.92m、深さ0.32m、長さは0.52m以上、東西方向に展開していくようです。遺構の二段目の落ち込み部分は幅1.4mで、深さ0.1mの浅い皿の形状をしていました。両端のテラスは北側が幅1.1m、南側が0.66mをはかるものでした。堆積状況と遺物の共伴関係などから、奈良時代頃に機能した道跡と考えられます。石組み遺構は第2調査区の中央で検出されました。石組みは南北方向を意識して築かれていました。幕末・明治初めの堆積土下で確認したことから、それ以前に神社とそれ以外（馬場通り）との境界を示すものとして構築した可能性が高いです。

遺物 最古の遺物は須恵器の坏蓋（8世紀後葉頃）です。劔神社の梵鐘（国宝）を寄進した頃（770年頃）にあたります。須恵器の中には鉄鉢らしき破片もあり、神宮寺にともなう仏具と考えられます。鉄鉢とは僧が使用する食器です。また、龍泉窯系青磁碗（12世紀後葉～13世紀前葉）も出土しました。他に、平安時代の整地層内に鉄滓20点と鞆の羽口5点など鍛冶に関連する遺物もありました。鍛冶とは金属を鍛え、金属製品を製作することです。こうした鍛冶関連遺物は平安時代の劔神社で鍛冶をおこなっていた証拠になります。

まとめ 今回の調査の結果、奈良時代頃と考えられる道状遺構が発見されました。また、平安時代後期～末頃にかけて厚さ1m近く埋め戻すなど、大規模な境内改変の痕跡が認められました。劔神社の縁起によると、劔神社は平清盛に焼かれ、息子の重盛が再興したとあります。今回確認された造成の時期は、平氏が活躍した頃にあたることから、平重盛による境内整備にともなう改変であったことも考えられるでしょう。

（堀 大介）

